効果的な子育て支援のあり方

—父親グループへのペアレントトレーニングプログラム適用の試み—

清水　里美[1)]・馬見塚　珠生[2)]・吉島　紀江[1)]
1)平安女学院大学短期大学部保育科，2）親と子の心のエンパワメント研究所

<要　旨>

近年、子どもの育ちに関わるさまざまな取り組みが検討されているが、なかでも親に対し子どもへの適切な関わり方を教える一連のプログラムは「ペアレントトレーニング(parent training)」として、子育て支援の場でさかんに取り入れられている。われわれは、これまで母親を対象にペアレントトレーニングを実施し、その効果を検証してきた。その中で父親にもペアレントトレーニングを受けてもらいたいという母親からの要望が寄せられていた。そこで、本研究では、ペアレントトレーニングプログラムの中から「トリプルP」を選び、父親グループに実施し、その効果を検証することを目的とした。また、幼稚園に対し子育て支援に関する意識調査をおこない、子育て支援サービスを提供する側と受ける側の認識の違いの有無についても検討した。

父親に対し子育てスキルを学習する機会を提供した結果として、子育ての負担が母親に偏重しており、子育てには協力が必要であるという父親の認識が得られた。また、そのような父親の認識は子育て姿勢の変化として行動に表れ、母親から肯定的に評価された。一方、幼稚園に対する調査結果から、ペアレントトレーニングの認知度の低さや父親向け子育て支援サービスの乏しさがうかがえた。

<キーワード>

子育て支援・父親・母親・ペアレントトレーニング・トリプルP

子育て支援に関わる取り組みの一つに、親に対し、具体的な子育てスキルを教えるプログラム（以下、ペアレントトレーニングとする）がある。ペアレントトレーニングの効果は、さまざまな場で検証されている（井潤ら，2011；清水ら，2012，など）。その効果としては、(a)親が自分自身の子育てを振り返ることで子どもに対する見方が肯定的に変わる、(b)効果的な対処法を学ぶことで子育てに対する負担感が軽減する、(c)親のメンタルヘルスが改善する、などが挙げられている。

ところで、従来のペアレントトレーニングは主に母親を対象としている。しかしながら、父親の子育てへの関与は、母親の子育てに対する肯定的な感情を高めるとともに子育てに関わるストレスを下げ（柏木ら，1994；原田，2008；柏木，2011）、子どもの発達を促す（牧野ら，1996；柏木，2008）ことが実証されている。また、子どもの不登校やひきこもりの問題に、幼少期の父母との愛着関係が影響しているという報告（五十嵐，2004）もあり、子育てにおける父親の役割は重要である。ところが、実際の父親向け子育て支援プログラムは、「遊ぶ、作る、食べる」といったイベント中心のものが典型（小崎，2009）であり、補助的な育児参加への支援にとどまっている。男女共同参画社会においては、父親が単に子育てに「補助的役割」で「参加」するだけではなく、「主たる育児者」として責任ある役割を担うための支援プログラムの必要性が指摘されている（前田，2007）。

そこで、父親を対象としてペアレントトレーニングを実施し、父親が積極的に子どもと関わるようになれば、子育てにおける役割意識が高まり、結果的に母親の子育て負担感が減るのではないかと考えられる。

また、われわれがこれまで実施したペアレントトレーニングの中で、参加した母親から、父親にも同様のプログラムを受けてほしいという要望が数多く寄せられていた(清水ら、2012など)。このような要望は、子育て支援サービスを提供する側が十分認識しておくべきことであるだろう。

本研究では、以上を踏まえ、効果的な子育て支援のあり方に関する２つの調査をおこなう。

調査Ｉ　グループトリプルＰによる父母への子育て支援効果

【目的】

子育て中の父親に対し、ペアレントトレーニング受講の機会を提供し、子育てに対する認識の変化を調べる。また、配偶者である母親についても子育ての負担感の変化について調べる。

【方法】

研究の対象

本研究で企画したペアレントトレーニングプログラム（表１）の全日程に参加でき、研究協力の同意が得られた子育て中の父親およびその配偶者を対象とした。また、ペアレントトレーニングに関心はあったが、日程が合わずプログラムに参加できなかった父親とその配偶者を対照群とし、調査への協力を求めた。参加者については、京都府内および大阪府内の幼稚園、京都市保育園連盟、京都府私立幼稚園連盟、京都府内の保健センター、京都市子どもみらい館、京都府内の児童館や子育て広場などにプログラムの案内配布および紹介を依頼し、希望者を募った。なお、父親を対象としていたが、託児つきであることを広報し、母親から子育ての負担を軽減することも意図した。

ペアレントトレーニングプログラム

本研究では「グループトリプルＰ」を選択した。「グループトリプルＰ」は、オーストラリアのクィーンズランド大学のサンダース教授を中心に開発された Positive Parenting Program（前向き子育てプログラム：以下、トリプルＰとする）の中の１つである。トリプルＰには、対象者が一人で参加する個別プログラムと、似たような事情の対象者が複数集まる集団プログラム（グループトリプルＰ；以下、GTP とする）があるが、いずれも子育て支援や虐待防止の効果が実証されており、すでに世界 20 数カ国で導入されている（Sanders et al., 2003；加藤, 2006；柳川, 2009）。

GTP は、通常、１グループ 10 名程度で、約２時間のセッションを週１回、計４回実施し、２～3 回の個別電話セッションをはさみ、最後にまたグループセッションをおこなう。４回目までのグループセッションでは、教材にワークブックを用い、DVD も視聴しながら、前向きな子育ての考え方や子どもの行動記録の取り方について理解を深め、さまざまな子育てスキルを学ぶ。電話セッションでは、学んだスキルの活用を確認し、改善策を話し合う。最終セッションでは、まとめと振り返りをおこなう。

表1　本研究で参加群の父親に実施したプログラムの概要

日程	セッション	内　　容	ワーク形式
2012年10月20日(土)	第１講 10:00～12:00	自己紹介、「前向きな子育て」とはどのような子育てなのかについて学ぶ、子どもの行動の捉え方について話し合う。	講　義 + グループワーク + ロールプレイ
	第2講 13:00～14:30	子どもと良好な関係をつくり，子どもの発達を促すための、10このスキルを学ぶ。	
	第3講 14:30～16:00	対処が難しい子どもの行動をうまく扱えるようになるための、７つのスキルを学ぶ。	
10月21日(日)	第4講 10:00～12:00	対処が難しい子どもの行動が起こりやすい場面を想定し、その行動が起こらないように備えるための計画的な活動を学ぶ。	
	第5講 13:00～15:00	まとめと電話セッションのスケジュールの確認。	
相談のうえ決定	電話セッション × 2回	スキルを家庭でうまく活用できているかを話し合い，工夫しながら子育てしていけるようサポートする。	電話相談 毎回20分程度
12月15日(土)	フォローアップ 10:00～12:00	終了後のフォローアップセッション。その後の子育てについてざっくばらんに話し合う。	グループワーク

本研究では、土日連続 2 日間で、上記の 4 回目までの内容を実施し、個別の電話セッション２回をはさんで、２か月後にフォローアップセッションを設けた（表１）。このような集中プログラムも遠隔地の居住者を対象にすでに広く採用されている。

プログラムを提供するファシリテーターは、認定資格を有する者に限られている。本研究では、ファシリテーターおよび記録係として有資格者３名が入った。

調査内容

調査Ｉには、以下の調査が含まれていた。

トリプルＰ質問票調査　GTP の事前と事後に日本で標準的に用いられている質問冊子（複数の質問票を一つの冊子にまとめたもの）が参加者とその配偶者に配布され、回答が求められた。事前調査は、プログラム開始２週間前までに自宅に届くよう郵送され、プログラム第１日目の始めに回収された。事後調査は、２ヶ月後のフォローアップセッション日の 2 週間前までに自宅に届くよう郵送され、フォローアップセッション当日に回収された。所要時間はそれぞれ 30 分程度である。用いた質問票は以下の通りであった。

質問票① 基本情報　年齢、家族構成、職業、子育て支援者の有無などについての基本情報を得るものである。

質問票② 子どもの長所と短所（Strengths & Difficulties Questionnaire, SDQ）　3～16歳の子どもの社会的に好ましい行動と好ましくない行動に対する親の認識を測るものである（Goodman, 1997;1999）。社交的行動、交友問題、多動性、行為問題、感情的症状の5領域、25項目について、3段階で評価をおこなう。各領域は10点満点で、得点の高い方が困難性を示す（社交的行動のみ反転項目）。

質問票③ ペアレンティングスケール日本語OU版（Parenting Scale, PS）　親の子育てスタイルを問うものであり（Arnold et al., 1993）、「手ぬるさ」（寛容すぎるしつけ）、「過剰反応」（権威主義的なしつけ、怒りなどの感情を表に出す）、「多弁さ」（過剰に長い叱責やくどくど説明するなど）の3領域と総合スコアを評価する。質問は全部で30項目からなり、7段階尺度である。点数が高いほど非機能的な子育てとみなされる。

質問票④ 親の心身の状態について（Depression Anxiety Stress Scale, DASS）　大人の「抑うつ」「不安」「ストレス」の症状を測る尺度（Lovibond et al., 1995）であり、全部で42項目から構成されている。ここでは、子育てに対する適応感を評価する。1項目0～3点の4段階で計算され、各領域42点満点で、値の高い方が問題とされる。

対照群の父親とその配偶者に対しても、上記と同じ質問票調査を同時期に実施した。

父親プログラム関連調査　参加群の父親に対し、事前、集中プログラム直後、フォローアップセッションの3回に分けて、質問紙調査と集団での半構造化面接調査を実施した。それぞれの時期の調査内容を以下に示す。

事前調査　参加申し込みのあった父親に対し、「参加動機」「子育ての悩み」「子どものしつけに関する悩み」についての質問紙をメールを通じて配布し、自由記述での回答を求めた。

集中プログラム直後調査　プログラム2日目の第5講終了後に「参加しての感想」「子どもと一緒に参加したこと」「今後の抱負」について尋ね、ICレコーダに録音した。

フォローアップセッションでの調査　数分程度の時間を用い、「影響を受けたグループメンバーとその理由」「子育ての考え方の変化」「配偶者への関わり方の変化」について質問紙調査をおこない、自由記述での回答を求めた。また、セッションの最後に、「同僚と子育ての話をする機会」「夫婦で子育ての話をするとき」「子育て講座への参加意欲」について尋ね、ICレコーダに録音した。

3か月後の追跡調査　フォローアップセッション終了3か月後に、参加者およびその配偶者に対し、質問紙調査を郵送にて実施した。質問項目は、「ポジティブな養育のチェックリスト」（日本子ども学会編, 2009）を参考に作成したもので、「GTP終了後の配偶者の変化」を問う7項目（かなり望ましい変化(3点)、望ましい変化(2点)、やや望ましい変化(1点)、変化なし(0点)、よくない変化(-1点)の5件法：図1参照）、「自分自身の変化」を問う3項目（非常に望ましい変化(2点)、やや望ましい変化(1点)、変化なし(0点)、ややよくない変化(-1点)、非常によくない変化(-2点)の5件法：図2参照）、「この間のストレスになる出来事の有無とその内容」、「GTP終了後の配偶者との関係の変化に関して（自由記述）」、「（母親用のみ）子育て中の父親が今回のようなプログラムに参加して、子育てスキルを学ぶことについて（自由記述）」であった。

倫理的配慮

質問票および質問紙については、匿名性の保護と秘密保持について書面にて説明し、同意書への署名を依頼した。また、半構造化面接調査では、回答したくない事項については回答しなくてもよいこと、ICレコーダに録音すること、後からでも申し出があれば削除可能なこと、収集した情報やデータは研究目的以外には使用しないことを説明したうえで、同意を得てから実施した。

分析の方法

質問票による調査　参加群および対照群の基本属性については、t 検定および χ^2 検定をおこなった。質問票の結果は、得点の平均値と標準偏差で示し、分散分析をおこなった。3か月後の追跡調査結果は、質問項目ごとに平均評定値を算出し、t 検定をおこなった。統計解析には、IBM SPSS V21を用いた。

半構造化面接調査および質問紙調査の自由記述　半構造化面接の結果は、録音データから逐語記録を起こした。逐語記録と自由記述はいずれも、Flick (1994) のテーマ的コード化の手法を参考に、カテゴリ化をおこなった。

【結果と考察】

トリプルP質問票調査

両群の基本情報と対象児　GTPには15名の父親から参加申し込みがあったが、直前に仕事のためのキャンセルがあり、2日間続けて参加で

きたのは10名であった（参加群10組）。対照群は12組であった。それぞれの群の基本情報について、年齢と家族形態については表2、子育ての支援者および職業に関しては表3に示す。年齢と家族形態について両群の有意差はなかった。また、専業主婦の割合についても有意差はみられなかった。子育ての支援者について、群別に父親と母親を比較した。その結果、いずれの群もχ^2検定で有意差がみられた（参加群：$\chi^2(2)=10.22$, $p<.01$、対照群：$\chi^2(2)=4.67$, $.05<p<.10$）。残差分析の結果、参加者群については、支援者が身内のみの割合は父親が有意に高く（$p<.01$）、身内以外の支援者がいる割合は父親が有意に低かった（$p<.05$）。また、対照群についても、身内以外の支援者のいる割合が、父親の方が有意に低かった（$p<.05$）。

GTPの対象とされた子どもの性別、年齢などについて表4に示す。参加群の対象児の平均月齢は40.9月であり、対照群は60.3月であった。いずれの群においても、幼児が対象とされることが多かった。

PS、SDQ、DASS（質問票②～④）　参加群10組のうち2名の配偶者（母親）は、同時期に開催された別のGTPに参加した（この2名は、表3の子育て支援者について「なし」と答えていた）ため、質問票の分析から2組を除き、残りの8組を対象とした。　各群における質問票ごとの得点の平均値と標準偏差を表5～7に示す。3要因分散分析をおこなった結果、SDQの「社交的行動」と「交友問題」について、事前事後で、参加群と対照群の交互作用が有意であった（社交的行動$F(1,36)=5.51$, $p<.05$、交友問題$F(1,36)=5.24$, $p<.05$）。「社交的行動」は子どもの共感能力、「交友問題」は子どもの他者と関係の築き方に関するものである。いずれについても、参加群は父親母親とも、事前に比べ事後の方が肯定的な評価であった。この結果は、事前事後の期間に対象児の共感能力や対人関係能力が高まったためというよりも、参加群の親の対象児に対する認識が肯定的な方向へ変化したためであると考えられる。子どもに対する親の見方が肯定的に変わることは、まさにペアレントトレーニングに期待されていることであり、また、これまでの研究結果で認められていることでもある（免田，2013など）。さらに、GTPに参加した父親だけでなく、母親にも同様の肯定的変化がみられたことから、父親の変化は、ペアレントトレーニングを受けていな

表2　群別基本情報（年齢と家族形態）

群		平均年齢	SD	範囲	家族形態 核	家族形態 拡大
参加群10組	父親	38.3歳	4.92	31-48	9	1
	母親	36.7歳	4.97	29-43		
対照群12組	父親	37.8歳	4.24	30-44	9	3
	母親	36.5歳	4.62	30-42		

表3　群別基本情報（子育て支援者と職業）

群		支援者 なし	支援者 身内のみ	支援者 身内以外も	職業 専業主婦	職業 フルタイム	職業 パート	職業 育休中	職業 自営業	職業 その他
参加群10組	父親		8	2		8	1		1	
	母親	2	1	7	5	2	2	1		
対照群12組	父親	1	6	5		10			2	
	母親		2	10	5	3	2			2

表4 プログラムの対象児について

調査対象	性別 男	性別 女	月齢 平均月齢	月齢 SD	月齢 範囲	同胞数（平均）
参加群10組	7	3	40.9月	22.4	9-72	1.6
対照群12組	8	4	60.3月	34.7	24-117	2.0

表5　各群のSDQの得点：平均（SD）

SDQ	調査時期	参加群(8組) 父親	参加群(8組) 母親	対照群(12組) 父親	対照群(12組) 母親
社交的行動	事前	3.88 (2.47)	3.50 (2.33)	5.92 (2.19)	5.00 (2.37)
	事後	5.00 (2.83)	4.75 (1.83)	5.75 (2.38)	5.25 (1.86)
交友問題	事前	1.75 (1.16)	3.00 (1.60)	2.00 (2.13)	1.75 (1.36)
	事後	1.25 (1.58)	2.63 (2.33)	2.83 (1.95)	2.17 (1.75)
多動性	事前	5.50 (2.14)	5.00 (1.41)	4.42 (2.43)	3.58 (2.47)
	事後	4.63 (2.62)	4.25 (2.05)	5.08 (2.71)	3.75 (2.67)
行為問題	事前	2.75 (1.49)	2.75 (1.58)	2.83 (1.85)	2.17 (1.70)
	事後	2.50 (0.76)	3.50 (1.31)	3.25 (1.54)	3.08 (1.88)
感情的症状	事前	1.13 (1.36)	2.00 (1.69)	1.25 (1.29)	1.67 (1.87)
	事後	1.13 (1.13)	2.13 (1.55)	1.75 (0.97)	1.75 (2.01)

表6　各群のPSの得点：平均（SD）

PS	調査時期	参加群(8組)		対照群(12組)	
		父親	母親	父親	母親
手ぬるさ	事前	3.41 (0.52)	3.10 (0.76)	2.92 (0.79)	2.99 (0.62)
	事後	3.17 (0.48)	2.88 (0.64)	2.72 (0.57)	3.12 (0.45)
過剰反応	事前	2.68 (1.03)	3.69 (1.43)	3.22 (1.11)	3.63 (1.30)
	事後	2.58 (0.96)	3.94 (1.30)	3.34 (1.04)	3.94 (0.95)
多弁さ	事前	4.20 (0.63)	3.79 (1.07)	4.35 (0.32)	3.89 (0.75)
	事後	3.68 (0.58)	3.95 (1.06)	4.04 (0.69)	3.88 (0.82)
総合	事前	3.35 (0.20)	3.35 (0.69)	3.35 (0.40)	3.41 (0.56)
	事後	3.05 (0.54)	3.38 (0.63)	3.24 (0.45)	3.55 (0.36)

表7　各群のDASSの得点：平均（SD）

DASS	調査時期	参加群(8組)		対照群(12組)	
		父親	母親	父親	母親
抑うつ	事前	1.75 (3.77)	1.38 (1.06)	1.33 (2.06)	1.83 (3.93)
	事後	2.13 (3.76)	4.50 (8.91)	2.58 (3.50)	2.58 (3.99)
不安	事前	1.38 (1.30)	2.75 (2.12)	2.42 (2.50)	2.83 (3.19)
	事後	2.00 (1.51)	2.88 (4.02)	2.17 (2.33)	2.33 (3.87)
ストレス	事前	4.13 (3.14)	9.00 (5.95)	5.00 (5.88)	6.58 (5.05)
	事後	4.38 (3.93)	8.50 (9.71)	5.08 (4.83)	6.58 (5.98)

い母親にもよい影響を及ぼす可能性があるといえよう。PS総合では、事前事後で、父親と母親の交互作用が有意であった（$F(1, 36) = 5.20$, $p < .05$）。参加群、対照群とも、父親は母親に比べ、事後（対照群についてはおよそ2か月後）の方がより機能的な子育てスタイルになっていたが、参加群の父親の方が対照群の父親よりもその傾向は強くみられた。

父親プログラム関連調査

事前調査　質問ごとの結果について、表8に示す。なお、参加動機のみ、括弧内に回答者数をあげた。調査時点での参加希望者は12名であり、得られた回答はそのまま使用した。

GTP参加動機　半数以上の父親は「妻からの勧め」といった外発的な動機であった。子育てに関する何らかの情報を得るのは、まずは母親であることが多いためであると考えられる。一方で、子育て参加の意義を感じ、自主的に申し込んだ父親もいた。

子育ての悩み　主に「配偶者との関係」と「子どもへの対応の仕方」に分類された。妻に協力したいがどうすればよいか、子どもにどう接してよいか、といった迷いがみられた。

子どものしつけに関する悩み　目に見える子どもの行動に対する心配としつけに関する自信のなさがうかがえた。父親の場合、接触時間が少ないがゆえ、子どもの表面上の（気になる）行動に目がいきやすいおそれがある。子どもと関わる時間が限られているからこそ、関わりの質を高める子育てスキルを習得することで、子どもとよい関係を築くことができれば、子育てへの自信につながると考えられる。

集中プログラム直後調査およびフォローアップセッションでの調査　「参加しての感想」「今後の抱負」「子育ての考え方の変化」「配偶者への関わり方の変化」に関しては、重なり合う内容が多くみられたため、合わせて、「GTPに参加しての変化」として表9に示す。その他は項目ごとに内容を記述する。

GTPに参加しての変化　子育てへの参加意欲や妻への協力意欲が示されていた。母親対象のGTP（清水ら，2012）における結果と比較すると、母親では「子どもとの関係」や「しつけ方」に関してさまざまな気づきが得られたのに対し、父親では「妻の子育て負担」や「子育てにおける父親としての役割」について認識が得られたといえよう。いおおまた、他の父親の思いや考え、取り組みを聞くことで、子育てに対する自信や意欲が高まったと考えられる。これは、母親グループでもみられた集団効果である。さらに、GTPで宿題が課され、子どもに集中的に関わる機会を得たことから、父親の子どもに対する見方が変わり、「しつける」ことよりも「関係を深める」ことに重きがおかれるようになったことがうかがえた。一方、学んだ子育てスキルについての活用意欲は示されたが、実際の活用には課題が感じられていた。

影響を受けたグループメンバーとその理由　母親グループ（清水ら，2012）に比べ、個人名はほとんど挙がらなかった。集中プログラムであったことも影響したと考えられる。

子どもと一緒に参加したこと　「子どもと二人で出かけることがなかったが、妻の大変さを知った」「子どもと一緒に参加できてよかった」「子どもがついてくるといったときは大丈夫か不安であったが、子どもが喜んで保育を受け

表8　事前調査結果

質問項目	サブカテゴリー	コード/アンケートの引用（括弧内の数字は人数）
参加動機	内発的動機	・子育てが平日できないから(1) ・妻の子育ての負担を軽減したい(1) ・父親として他の人の子育てのことを知りたかった(1) ・子育てが初めてでわからないから(1) ・興味をもったから(1)
	外発的動機	・妻に言われて(6) ・公的機関からの紹介(1)
子育ての悩み	配偶者との関係	・妻の悩みに応えられない ・妻のサポートができていない ・妻の理解ができていない ・妻がずぼら ・妻の負担が大きい
	仕事との関係	・子育てと仕事のバランスがとれていない
	子どもへの対応の仕方	・スポーツは何をさせたらよいか ・しつけの方法 ・知恵がついて困っている ・どう育てたらよいか ・叱り方 ・注意するときの判断
子どものしつけに関する悩み	子どもの気になる行動	・いうことを聞かない ・すぐ泣く ・人を叩く ・食事に集中できない ・すぐに嫌がる ・不器用 ・妻のいうことしか聞かない ・気に入らないときの態度がよくない
	自信のなさ	・上手く子育てができているか ・一貫性のない子育て ・自分の都合を優先してしまっている
	しつけの方針	・スマートフォンでのゲームのさせ方 ・テンションがあがりすぎたときの対処

ていて安心できた」「心配していたが、２人で参加するのもいいと思った」という感想が出され、父子で行動する機会となったといえよう。

同僚と子育ての話をする機会　「職場で話をする機会がない」「とくに子育ての悩みを話すことはしていない」という意見が多かった。父親は、日常的に子育ての話をする機会が限られており、また情報も入りにくいことがわかった。この結果は、基本情報で「子育ての支援者」について、父親は「身内以外」はほとんどいなかったことと一致するだろう。父親同士交流できる場を提供することで、共感しあえる体験を通

表9　GTPに参加しての変化

	サブカテゴリー	コード/発言の引用
子育てに関すること	父親同士の共感	・みんな悩みが同じである ・悩みが似ている ・他のお父さんと話ができてよかった
	気づき	・考えの幅が広がった ・自分に原因があることに気づいた ・余裕がもてるようになった ・子どもの成長や変化を見られるようになった
	参加意欲	・子どもの所属先の行事にも積極的に参加していく ・初心を忘れずにいたい ・考えて子育てをしていきたい
	子どもへの関わり	・自発的な行動が待てる ・声を大きくすることが少なくなった ・丁寧な対応をするようになった ・考えて対応するようになった ・子どもの言動や行動に注意を払うようになった ・子どもとのよい関係の時間が増えた ・子どもと触れ合うようになった
配偶者との関係	理解	・妻が不満のないようにしたい ・妻の大変さがわかった ・妻をほめたい ・妻だけが子育てをするのではないと理解した
	協力意欲	・情報を共有していくようになった ・妻と話をする機会が増えた ・自分のできる範囲で協力をしていく ・できる家事を協力する ・家事も分担していきたい ・妻に合わせていく ・学んだことを妻に話をしたい ・妻と一緒に子育てしていきたい ・妻と共有したい
	課題	・自分は変化したと思ったが妻からするとそうでもない
GTPで取り扱った子育てスキルに関連すること	活用	・少しでもほめるようになった ・具体的に指導をするようになった ・事前準備をするようになった ・褒美を活用するようになった ・ほめ方を活用するようになった ・愛情表現をするようになった ・学んだ子育て技術を使っていきたい
	課題	・技術の使い方が上手くいかない ・技術の活用方法に工夫が必要である ・意識しすぎると肩に力が入りすぎる ・強制してしまっている ・毎回、徹底してできていない ・仕事のストレスがあると上手く関われない ・子どもと関わる時間がない

して父親の子育て意識を高めることにつながると考えられる。

夫婦で子育ての話をするとき　食事の合間などが多く、「妻に子どもの様子を聞く」「子育てに関する情報は妻から」とほとんどの父親がとくに平日は子育てのための時間をもてていないという結果であった。意識して子どもの話を夫婦でするのは、「何か日常的でない相談事が生じたとき（例えば不登校や非行など）」という意見に賛同が得られていた。

子育て講座への参加意欲　「妻からの勧めがあれば」という意見が多かった。また、今回のGTP が無料であったことや託児つきであったことも好評であった。一方、土日、二日連続のプログラムについては、予定を調整しにくいことや自分の休みが取れないことから不評であり、週一あるいは隔週の方がよいという意見であった。また、配偶者にも同じプログラムを受けてもらいたいが、夫婦同席よりも場は別の方が本音で話しやすいという意見も得られた。さらに、「父親同士が、“しらふ”で子どもや子育ての話をするのは初めてで、新鮮であった」という感想に対する共感が多く寄せられた。

3か月後の追跡調査

GTP 終了後の配偶者と自分自身の変化　父親母親それぞれの平均評定値を図1、図2に示す。図1、図2におけるすべての項目に関して、父親と母親の平均評定値に有意差はなく、父親も母親も肯定的な方向への変化がみられた。とくに、「母親からみた父親の変化」では、子どもを具体的にほめるようになっており、ペアレントトレーニングで紹介される子育てスキルが活用されていることがうかがえた。「父親からみた母親の変化」では、父親に対し笑いかけたり、子育ての相談をしたりするようになったとされており、夫婦のコミュニケーションがよくなったといえよう。また、「自分自身の変化」では、母親の子育ての負担感が減り、父親母親ともに夫婦間での子育ての相談や子どもについての情報交換が増えていた。

GTP 終了後の配偶者との関係の変化　父親の自由記述の内容を表10に、母親の自由記述の内容を表11に示す。父子関係の深まりや夫婦の信頼関係の深まりがみられた。

父親が子育てスキルを学ぶこと　母親の意見を表12に示す。父親の子育てへの積極的な関与、母親自身の子育ての負担感の軽減、夫婦関係の改善が示唆され、大半の母親から肯定的に受け容れられていた。しかしながら、なかには、やや否定的な意見があり、父親のみがスキルを学ぶことによる母親の不安感の表れとも考えられた。父親の感想にもあったように、夫婦が共に子育てスキルを学ぶ機会が提供されることが望ましいであろう。

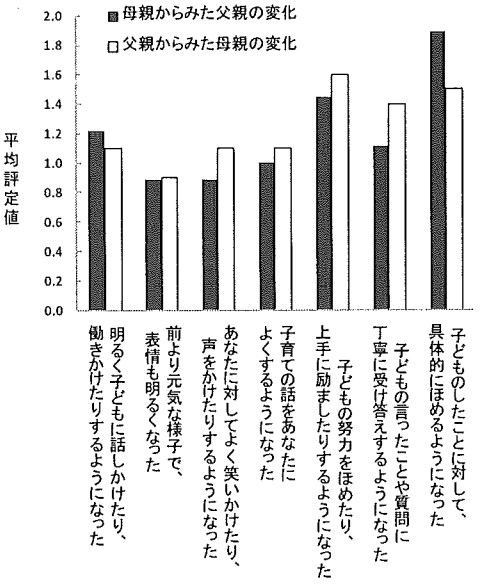

図1 3か月後の追跡調査結果（配偶者の変化）

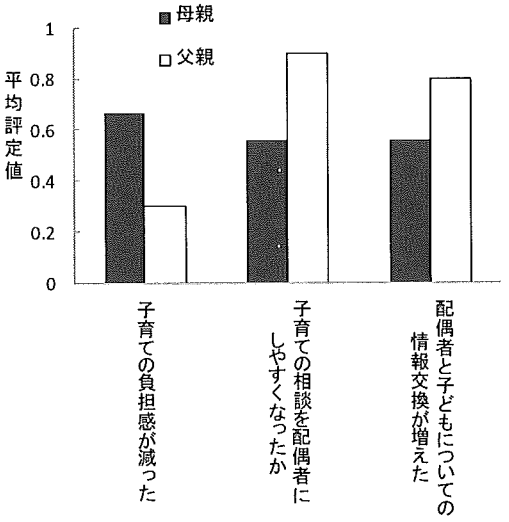

図2 3か月後の追跡調査結果（自分自身の変化）

表10 父親の自由記述の内容

・子どもの機嫌が悪いとき、何が原因でこうなっているのかなどよく考える(観察)するようになった。
・私一人で子どもを連れて出たりして、妻が一人になれる時間を作るよう努力するようになった。
・子どもはしやすい方だと思うし、妻は以前から頑張っている。夫婦で共通しているところは「〇〇してえらいね」とか具体的にほめるところ。しかし、いろいろなところで私がトリプルPを活用していることが見えないよう。 やはり夫婦でしかも短期間で一緒に受けられる講座があればと思う。ぜひ受けさせたい。 夫婦二人とも仕事が忙しく、子育て以外の話もなかなかできないが、良質な時間をできるだけ多く取れるよう頑張る。

表11 母親の自由記述の内容

・子どもをしつけるメソッドを共有しているので、ハイリスクな状況が起きたときの対応がスムーズ。
・以前より家事を手伝ってくれることが多くなった。
・子どもが「パパあそぼ」とよく声をかけるようになり、親子で遊ぶ姿をよく見ることができた。
・プログラム内容を実践したい気持ち満々なようだが、仕事が忙しくなり、持ち帰り仕事も増えて時間的に無理があるように思う。
・子どもをできるだけほめるようになった。

表12 父親が子育てスキルを学ぶことについて

・父親のタイプにもよると思いますが、うちはプログラムの内容を吸収するのに非常に積極的だったので、私も教えられることが多々ありよかったと思う。
・より積極的に育児に参加してくれると思います。私がいっぱいいっぱいになっていて、子どもの感情をくみ取ってあげられなくなっているときも冷静に子どもと接して対応してくれています。
・夫にも積極的に育児に関わってもらうきっかけとなり、とても有意義だと思いました。
・普段子どもと接する時間が少ない夫ですが、このようなプログラムに参加して学ぶことで、子どもとの関わりがより密接なものになるのではないかと思います。また子育てに関する知識や考え方を夫婦で共有しやすくなるのではないかと期待します。
・子育て観が一致できた。私だけが頑張ろうと気を張っている毎日で疲れていましたが、頼れるようになり子育てが少し楽になりました。夫婦で協力しながらこれからも頑張っていきます。またプログラムがあれば参加して勉強したいです。
・率先して学ぶ姿はありがたい。ですが、逆に方法論を学ぶことで、こうすべき、本当はこうした方がいいのに、という評価的な見方で自分の子どもを見られるでは・・・と思うと、しんどいです。主人がしたわけではないのですが、あくまで私の主観です。
・とても良いことだと思います。
・このような機会があり大変よかった。ほかのお父さんの子育ての話を聞けて夫婦とも勉強になったと思う。

調査Ⅱ：就学前教育機関における子育て支援サービスの内容

【目的】

就学前機関における子育て支援意識を調べ、サービスを提供する側が父母に対する子育て支援の内容についてどのような認識をもっているのかを明らかにする。

【方法】

研究の対象

京都府内の私立幼稚園を対象とした。実際に質問紙に回答するのは園長もしくは主任であると想定した。

調査内容と手続き

父親向けGTPの参加者募集案内の配布において協力を得た京都府私立幼稚園連盟に、ペアレントトレーニングと子育て支援に関する質問紙の配布と回収を依頼した。

質問項目は、「ペアレントトレーニングに関して（知っているかどうか、必要性を感じるかどうか、保護者に紹介したいかどうか）」と「父親母親それぞれに対する支援について」であった。「父親母親それぞれに対する支援について」の下位項目は、①父親／母親に対して何らかの支援をおこなっているか、②どのような内容か、③父親／母親が子育てスキルを学ぶ機会の必要度、④父親／母親向けプログラム実施時の配慮、であった。②と④については選択肢を設け、該当するものをいくつでも選択できる形式とした。②の選択肢は、園行事への参加、行事の手伝い、父親／母親のつどい、父子／母子交流会、父親向け／母親向け学習会、その他、であり、母親に対する支援内容の選択肢にのみ、サークル活動と一時預かりも加えた。また、④の選択肢は、出席しやすい日時、出席しやすい時間帯、出席しやすい場所、託児つき、同性講師、その他、であった（図3～6参照）。

配布の対象となった園は40園であった。配布時期は、10月末で、回答は任意とし、12月で締め切った。

【結果と考察】

18園から回答が得られた(45.0%)。幼稚園による父親母親別支援活動の有無について図3に示す。母親支援をしていない園はなかった。一方、父親支援をしている園は6園(33.3%)であり、父親支援に対する意識はまだ低いことがわかった。

ペアレントトレーニングに関する認知度と紹介意欲に関するクロス集計は表13に、認知度と必要性に関するクロス集計は表14に示す。ペアレントトレーニングについて、「内容まで知っている」という園はなかった。しかし、「聞いたことがある」という園の多くは、ペアレントトレーニングは「必要」、あるいは「紹介したい」と答えていた。

子育てスキルを学ぶ機会の必要度に関する結果は、図4示す。父親よりも母親に対して「とても必要」と考えられる傾向がみられた。

父親、母親それぞれを対象に、幼稚園が実際におこなっている子育て支援活動の内容について、図5に示す。母親に対しては、「つどい」「学習会」など行事以外にもさまざまな取り組みが企画されており、母親同士が交流できる機会が作られていた。また、「サークル活動」や「一時預かり」をおこなっている園も多かった。一方、父親向けの企画は乏しかった。

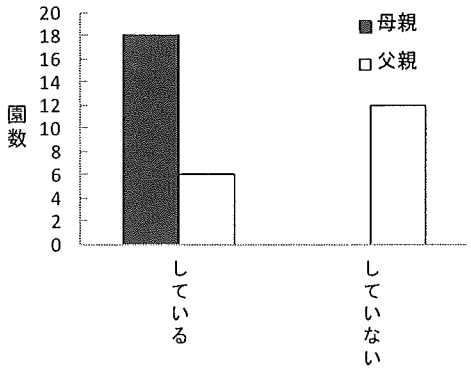

図3 親支援活動の有無

表13 ペアレントトレーニングの認知度×紹介意欲

認知度	紹介したい	できれば	あまり	計
内容を知っている	0	0	0	0
聞いたことはある	5	9	0	14
聞いたことがない	0	2	2	4
計	5	11	2	18

表14 ペアレントトレーニングの認知度×必要性

認知度	とても必要	ある程度	必要ない	計
内容を知っている	0	0	0	0
聞いたことはある	5	9	0	14
聞いたことがない	0	3	1	4
計	5	12	1	18

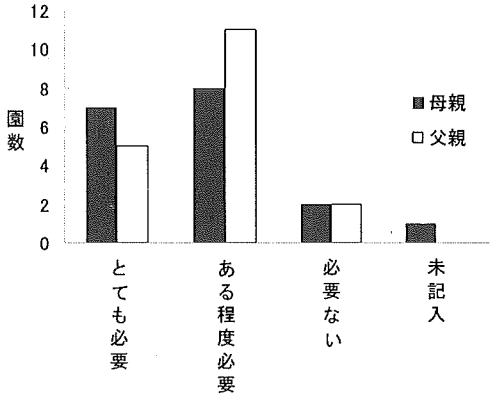

図4 親が子育てスキルを学ぶ機会の必要度

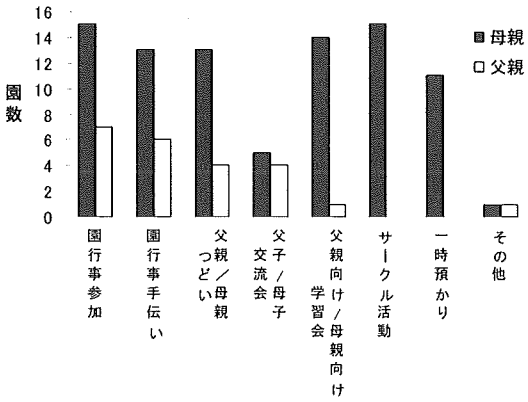

図5 支援活動の内容

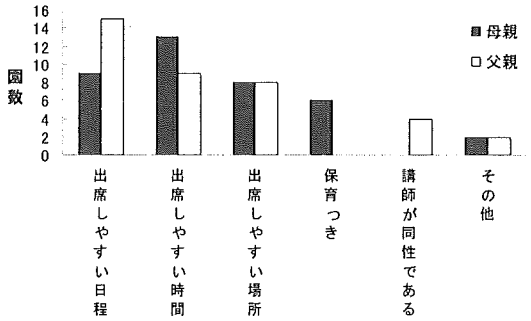

図6 親向けプログラム実施時の配慮

幼稚園による親向けプログラム実施時の配慮に関しては、図6に示す。父親対象の場合に「託児サービスをおこなう」という意識が低いことがうかがえた。

【総括】

本研究の調査Ⅰの結果、ペアレントトレーニングを受講した父親は、(a)学んだ子育てスキルを積極的に活用し、前向きな子育てをおこなおうとする姿勢がみられた、(b)子どもへの肯定的な働きかけが増え、子どもとの良好な関係を築くことへの関心が高まった、(c)母親の子育て負担感を理解し、子育てに対する協力や参加の意欲が高まった。また、母親についても、(a)子どもの行動に対する評価がよくなった、(b)夫婦関係において肯定的な変化がみられた、(c)子育て負担感の軽減がみられた。柏木ら(1994)は、父親の育児参加が多いと母親の子育てへの肯定感情が高く、父親の育児参加が少ないと母親の子育てへの否定感情が高くなると報告している。調査Ⅰで、父親がペアレントトレーニングを受講した後、母親の子育て負担感が減ったが、実際に父親の育児参加が促されたためであると考えられる。前田(2007)は、母親の不安対策に焦点化した子育て支援は必ずしも効果的とはいえず、むしろ父親が育児全般に関われるよう環境を整えることが有効であると指摘しているが、父親に対するペアレントトレーニングは子育て参加を促す機会の提供という点からも有効であったといえよう。

本研究の調査Ⅱで、子育て支援機関である幼稚園において、父親を対象とした子育て支援はいまだ乏しいことが示された。これは、楠本ら(2012)の兵庫県の幼稚園での調査結果とも一致する。父親向けに、子育てに関する学習の機会の提供や、父親同士の共感的な仲間作りを促す取り組みが求められるといえるだろう。

今後の課題として、今回は参加群が限られていたため、父親へのペアレントトレーニングを幅広く実施し、効果をさらに検証していきたい。また、母親だけがペアレントトレーニングを受

けた場合の父親への効果についても検討する必要があるだろう。

【引用文献】

Arnold, D. S., O'Leary, S. G., Wolff, L. S. et al. (1993). The Parenting Scale : A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, 5, 137-144.

Flick, U. (1994). Social Representations and the Social Construction of Everyday Knowledge: Theoretical and Methodological Queries, *Social Science Information*, 2, 179-197. (ウヴェ・フリック著・小田博志・春日常・山本則子・宮地尚子訳 (2002). 質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論 春秋社)

Goodman, R. (1997). The Strength and Difficulties Questionnaire: Research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.

Goodman, R. (1999). The extended version of the Strength and Difficulties Questionnaire as a guide to child psychiatric caseness and consequent burden. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 40, 791-801.

原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会

原田正文 (2008). 完璧志向が子どもをつぶす ちくま新書

五十嵐哲也 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.

井澗知美・上林靖子 (2011). 発達障害児の親へのペアレントトレーニング－自験例 29 例による有効性の検討－ 児童青年精神医学とその近接領域, 52, 578-590.

柏木惠子・若松素子 (1994). 親となることによる人格発達:生涯発達的視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.

柏木惠子 (2008). 子どもが育つ条件 家族心理学から考える 岩波書店

柏木惠子(2011). 父親になる、父親をする 家族心理学の視点から 岩波ブックレット No. 811.

加藤則子(2006). 前向き子育てプログラム(トリプルP) の紹介 小児保健研究, 65, 527-533.

楠本洋子・名須川知子 (2012). 兵庫県公立幼稚園における子育て支援に関する研究 学校教育学研究, 4, 15－21

小崎恭弘 (2009). 子育て支援施設における父親支援プログラムの取組—A 県下の子育て支援施設アンケート調査結果より— 日本保育学会第 62 回大会発表論文集, 740.

Lovibond, P. F. & Lovibond, S. H. (1995). The structure of negative emotional states: Comparison of the Depression Anxiety Stress Scales (DASS) with the Beck Depression and Anxiety Inventories. *Behaviour Research and Therapy*, 33, 335-343.

前田由美子 (2007). 子育て支援は父親支援－性別視点による児童虐待予防のための子育て支援再検討－ 共愛学園前橋国際大学論集

牧野カツ子、柏木恵子 (1996). 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房

免田賢 (2013). ペアレントトレーニング (親訓練) の理論的基礎—効果的プログラム開発にむけて— (その２) 佛教大学教育学部学会紀要, 12

日本子ども学会編 (2009). 保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡調査から 赤ちゃんとママ社

Sanders, M. R., Markie-Dadds, C, & Turner, K. M. T. (2003). Theoretical, Scientific and Clinical Foundations of the Triple P-Positive Parenting Program: A Population Approach to the Promotion of Parenting Competence. *Parenting Research and Practice Monograph No. 1*, The Parenting and Family Support Centre, The University of Queensland, Brisbane, Australia.

清水里美・吉島紀江・磯野眞紀子 (2012). 幼稚園における、前向き子育てプログラム (トリプルP) の効果検証－所属集団のスタッフによる評価を含めて－ 聖公会保育第 18 号

柳川敏彦・平尾恭子・加藤則子・北野尚美・上野昌江・白山真知子・山田和子・家本めぐみ・包丁高子・志村光一・梅野裕子 (2009). 児童虐待防止のための地域ペアレンティング・プログラムの評価に関する研究－「前向き子育てプログラム (トリプルP) の有用性の検討－」 子どもの虐待とネグレクト, 11, 54-67.